大阪府知事　横山ノック殿

 釜ヶ崎就労・生活保障制度実現をめざす連絡会

庶民ではないけれども庶民派を自認する横山知事へ

 庶民の街釜ヶ崎の声を聞いて下さい

行政組織大阪府の責任者は、多くの庶民によって選ばれた横山知事である。さぞや今頃は、「やっぱり、国会議員を続けてたら良かった」と悔やんでいることだろう。「こんな予算案を出すようじゃ、庶民派もあぶないか。庶民派シンパぐらいならまだいけるか」などと考えているかも知れない。現実の政治は漫才のネタではない。勿論、横山知事もそんな感覚ではいないであろう。がしかし、私たちには、今のところ、名前で頑張った知事でしかない。そこが庶民派たるゆえん、いやそこだけが庶民派なのであろうか。

老人医療費や府育英会助成の見直しはとても庶民派を自認する人の提出する議案とは思えない。特別職や指定職の給料と管理職手当を減額することで、痛みを分かち合っている、分担しているつもりかも知れない。しかし、満額受け取ろうとどうしようと、影響を被る庶民には別世界の話で、何の感慨もわかない。見直すべき企業向けの予算はないのか、企業を軸にした社会運営を見直す庶民の知恵はないのか。

釜ヶ崎でも大いに心配している。野宿し、明日の命の見通しがつかない高齢の労働者が心配している。釜ヶ崎高齢労働者の希望の光として大きく育てていく決意を示してもらいたい高齢者のための事業が、予算難を理由に吹き消されることを。

横山知事は、野宿を余儀なくされている労働者を、再び何の希望もない路上死とだけ日々向かい合う生活に追いやろうというのだろうか。ここで言う路上死が、抽象的なものではなく具体的な今日明日の、そして昨日の話であることをしっかりと頭に置いていただきたい。「為さざるものは、殺すものである」

「重点政策」で挙げられている緊急性のある施策の一つに、「女子、中高年、障害者の雇用促進」があると伝えられている。パンフレットを配るだけの「促進」ではなく、具体的で即効性のある事業を府が模範モデルとして行うべきである。釜ヶ崎はとくに強く求めている。

釜ヶ崎からの要望書を自身でじっくり読んで応えていただきたい。

「福祉切り捨て議会」の前評判に気をもみつつ、強く要望する。

 以　　上

１９９６年９月　　日